

舞踊と民主主義～関係性を探る試み

阪本洋三（近畿大学）

舞踊も民主主義も、あまりに広く深く果てしない研究対象であることは承知の上で、これら2つの関係性を探る研究の可能性を模索してみたい。

2021年の日本ヴィクトリア朝文化研究学会で、「ディアギレフのバレエ・リュッスについての報告」を依頼された時、バレエ・リュッスのバレエが「いかにヴィクトリア朝ロマンティズムとはかけ離れたものであるか」ということを指摘するにあたり、ディアギレフはバレエにおけるモダニズムを身体芸術の新たな表現と考えただけでなく、「絶対王政下、帝政ロシア下で庇護されて発展したバレエ芸術を、民主主義社会、資本主義社会の枠組みの中で再生させたインプレサリオとして君臨した」という視点で議論することを試みた。

ディアギレフ、フォーキン、ニジンスキーたちバレエ・リュッスのメンバーは、モダン・ダンスのパイオニアの一人、ダンカンの公演に触発されて対抗意識を燃やしたこともきっかけで、バレエ芸術のモダニズムを模索した。作品創作のテーマを選ぶにあたって、基本的人権とか、女性の権利の拡大とか人種間の平等、といったところまで踏み込んで考えようとしたかどうかは定かではないが、少なくともロマンティズムが掲げていた美意識やそれまで社会的に健全であったり安全であったりした伝統や常識に果敢に挑戦する表現の試みを模索したことは否定できない。これらの傾向は「アヴァン・ギャルド」と呼ばれる概念に通じる芸術運動を彼らがバレエにおいて体現しようとしていたことを意味し彼らの挑戦は民主主義社会における芸術の役割、すなわち少数派や非常識的な「ものの見方」を公共空間において問いかけ、提示する精神に通じていた、と思われる。

一方でモダン・バレエにおいて民主主義の理念を反映した作品が意識的に作られ始めたのは、バ

ランシンがニューヨークに渡ってからのことかもしれない。ニューヨークでは、グラハムや、エイリーら、モダン・ダンスの（パイオニア世代というよりも）第二世代以降のクリエイターたちが、女性やアフリカ系アメリカ人の視点からテーマを選択し、自由、平等、等、民主主義の理念を舞踊作品に体現した。またヨーロッパでもヨースの *The Green Table* のように芸術家の視点から戦争の理不尽さに正面から向き合うような作品が生まれたし、バウシュは社会変革を想起させる作品を残し、イトウは日米の狭間で平和、友好を訴えた。

具体的な舞踊の作品群、複数の振付家を選び、民主主義の理念に照らして関係性を探っていく類の試みとは逆方向に、芸術と民主主義・公共性・教育、といった芸術と市民社会・公共圏との関係性の理論構築に寄与した数名の研究から、舞踊の作品群や振付家について考察する試みも可能だろう。例えばレヴァイン、ズイダーヴァアト、グリーン、バルムらの「芸術と民主主義の関係性」をめぐる理論は舞踊研究にも新しい視座をもたらすと考えられる。

更には文明史的な視点も重要だ。20世紀以降、多くの植民地は独立国家へと転じ、旧宗主国の文化力は相対的に低下していった一方、日本のような敗戦国はアメリカのような勝戦国の文化的影響下に組み込まれていった。そこには民主主義的価値観の共有というナラティブが現実と幻想を内包しながら社会、教育に浸透していく状況があった。

グローバリゼーション、多文化主義、SDGs、等、民主主義社会が未来志向のユートピア的理念を次々と掲げる中、市民は終わりのない社会変革の努力を続ける。普遍的に身体と関わり、常に変遷する身体表現・表象である舞踊と、高みを目指し続ける性質を持つ民主主義という政治的文化体との関係性を探る研究には、多様性と共に探求を試みるだけの価値と課題、光と影が見え隠れする。